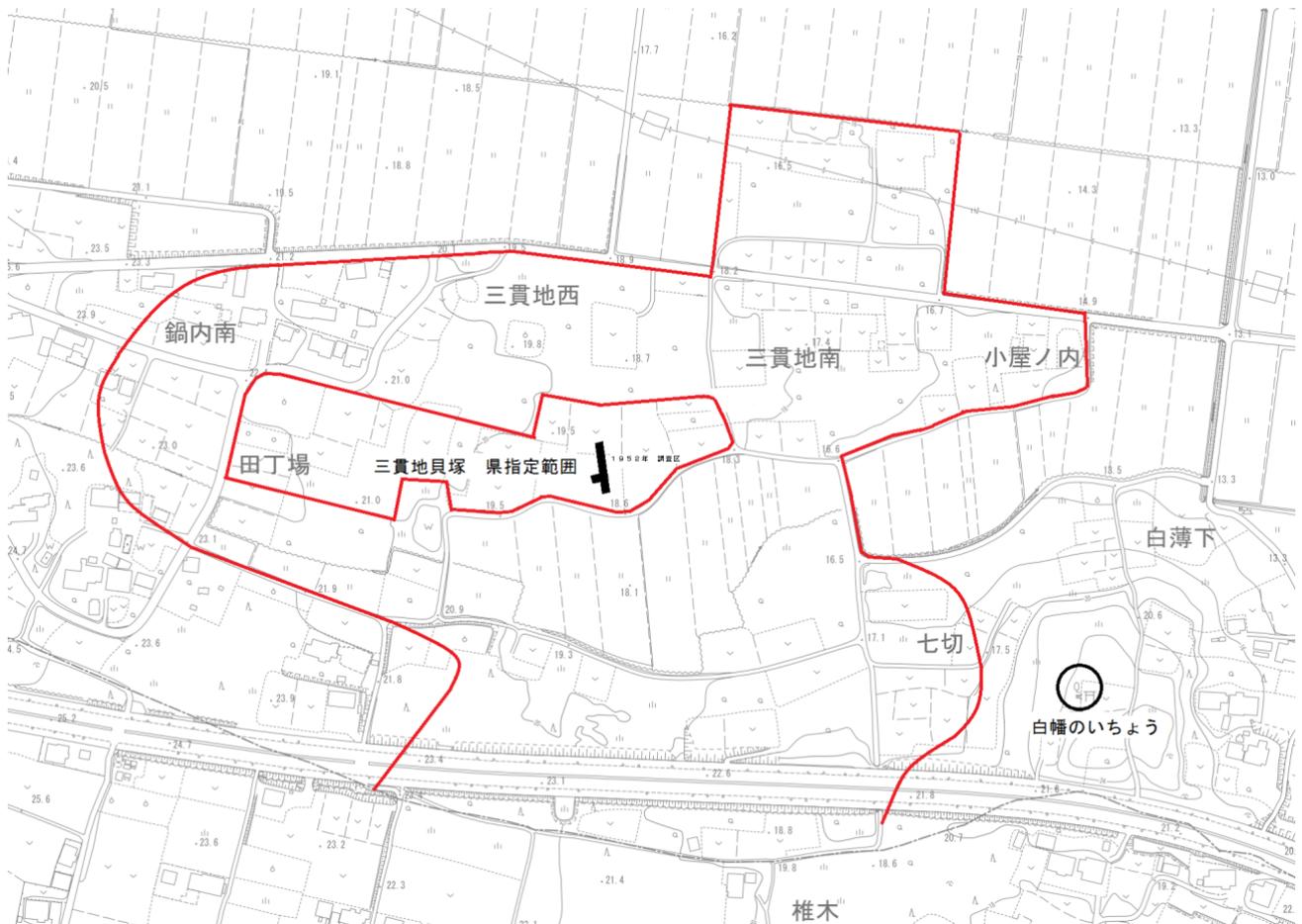


## ○三貫地貝塚と三貫地遺跡 遺跡範囲と周辺地図



三貫地貝塚は現在の海岸線から西に約4 kmの駒ヶ嶺地区に所在しています。貝塚は標高19 mから22 m付近に形成され、北側は東走する立田川が形成した沖積低地が広がっています。大正時代以前は、立田川下流域には新沼浦と呼ばれた潟湖がありました。新沼浦は、相馬地域開発により相馬共同火力発電所が建設されるなど近代に入って変貌をとげましたが、この開発事業に伴う発掘調査や地質調査などの自然科学的分析により、縄文時代の立田川流域の自然環境が次のように判明しています。縄文早期末から中期にかけては、原釜（相馬市）－今神（新地町）－今泉（新地町）の海岸線は外洋と直接つながり、立田川下流域は、現在の県道394号線（旧国道6号線）付近まで外洋水が入り込む内湾になっていたようです。その後、縄文時代中期後葉から後期中葉の頃には、原釜－今神－今泉の海岸部では砂州が発展し、湾口がほぼ塞がれた状態となったため、それまでの内湾は潟に変化します。その後、三貫地貝塚が形成される縄文時代後期から晩期中ごろにかけて、原釜－今神－今泉にかけての湾口が広がり、海水の侵入が増大したようです。

このことから、縄文時代後期から晩期にかけての三貫地貝塚の近隣まで海が迫っていたことが判明しています。

## ○三貫地貝塚の発見と調査履歴

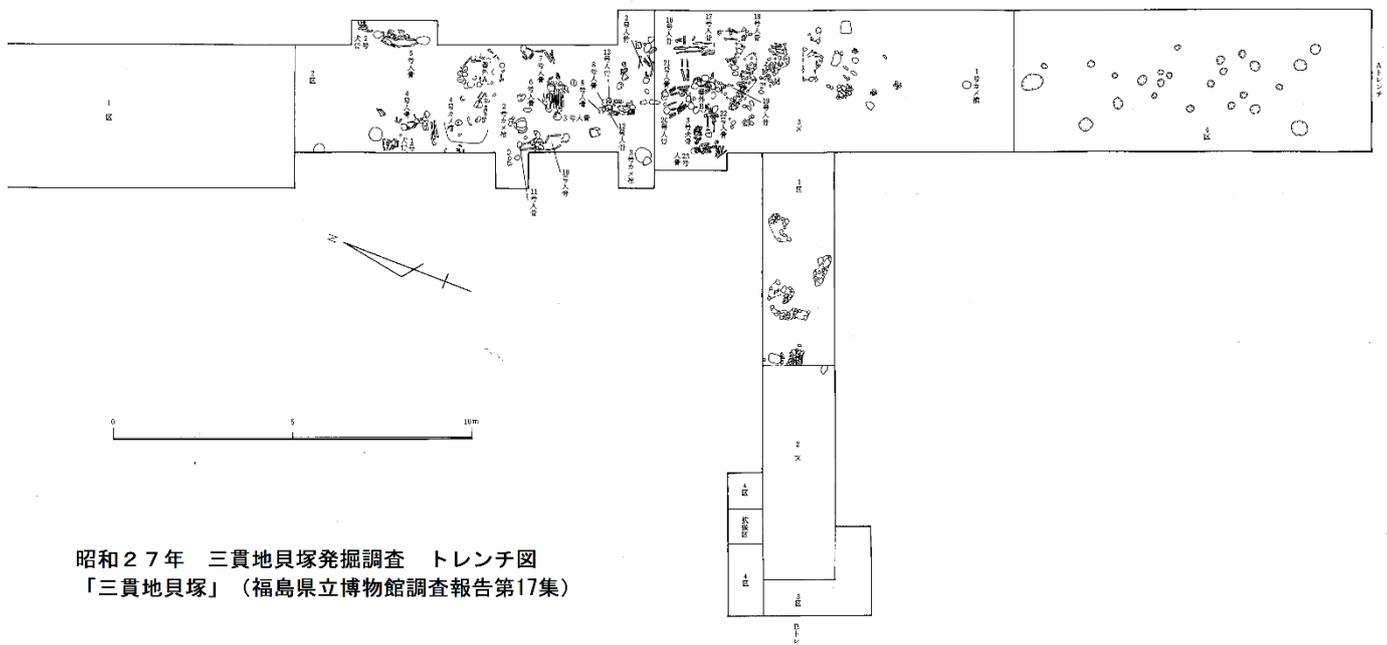
三貫地貝塚は明治27年に相馬市中村在住の舘岡虎三によって発見され、同年「磐城国宇多郡駒ヶ嶺貝塚記」によって中央の学会に報告されました。この報告のなかで舘岡は「宇多郡駒ヶ嶺村大字駒ヶ嶺

字高田小字三願寺 (或ハ曰ク三貫地)」と表記し、貝の密集箇所が7、8か所、ハマグリやアサリが多く、貝層の深さが1尺から3尺であることを報告しています。

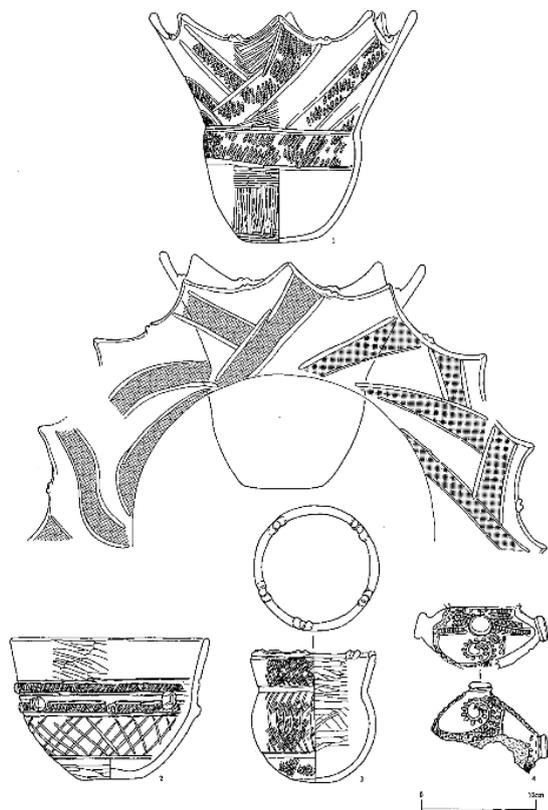
大正13年5月1日から8日まで、東京帝国大学人類学教室が新地貝塚を調査していますが、この調査期間中の5月2日、3日の二日間に限り、三貫地貝塚の発掘調査もおこなわれており、この時の調査で幼児の人骨を含む3体の人骨が確認されています。なお、この時の調査には、後に縄文原体 (撚糸文よりいともん) の研究や縄文土器の編年研究などを行って、現在の考古学研究の礎を築いた山内清男がいます。山内は、昭和12年に記した「先史考古学」第一巻第二号「日本先史時代の於ける抜歯風習の系統」のなかで東北地域の縄文時代後期の例として三貫地貝塚をあげています。

昭和27年3月26日から4月5日にかけて日本考古学協会により比較的大規模な発掘調査が行われました。田丁場地内に南北幅4メートル、長さ40メートルのAトレンチとAトレンチに直交する形で幅2メートル、長さ12メートルのBトレンチが設定され、計184平方メートルが調査されています。

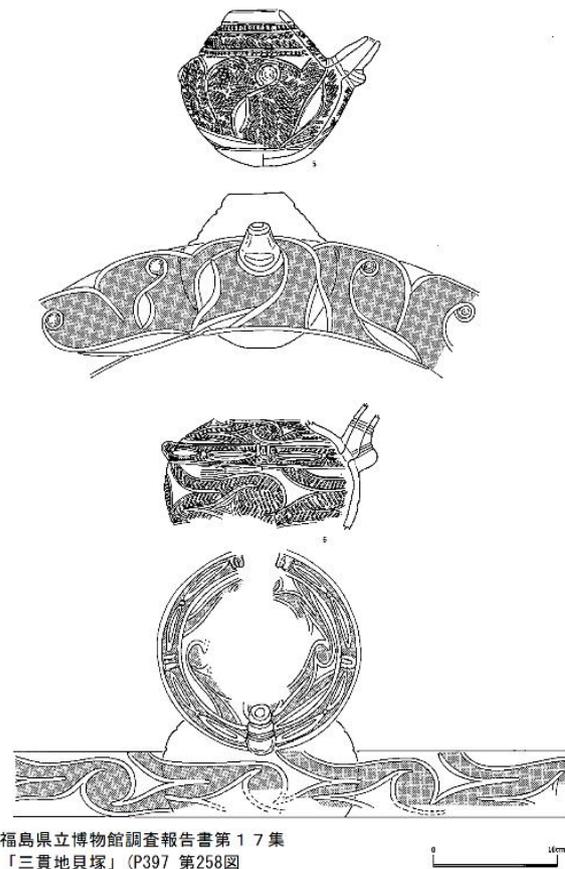
昭和27年に、日本考古学協会において、縄文式文化編年研究特別委員会が組織され、全国の重要遺



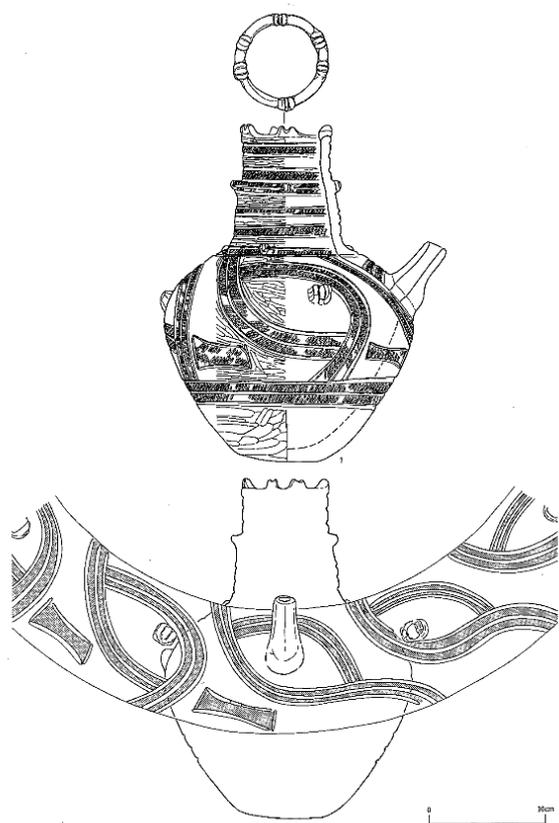
跡を調査しており、そのうちの一つに三貫地貝塚が選ばれております。特別委員会は調査責任者を明治大学の甲野勇がつとめ、他には芹沢長介、江坂輝彌、埴原和郎、伊藤信雄などの当時の代表的、あるいはその後の考古学会を代表するメンバーにより構成されていました。この時の調査報告書については、長い期間、諸般の事情により刊行されていませんでしたが、昭和63年に福島県立博物館により再整理された後、刊行されました。報告書により三貫地貝塚からは多くの縄文土器のほかに、50体を超える人骨と3体の犬骨が出土していたことや、多くの遺物群を再整理した結果、縄文時代中期末葉から後期、晩期までの各時期の土器が出土しており、新地貝塚とほぼ同時期に形成された貝塚であることが改めて判明しました。また、土器以外にも骨角器や土偶、装飾品なども多く確認することができ、縄文時代中期末から晩期にかけての縄文人の生活様式を知る上で、大変貴重な発見となりました。



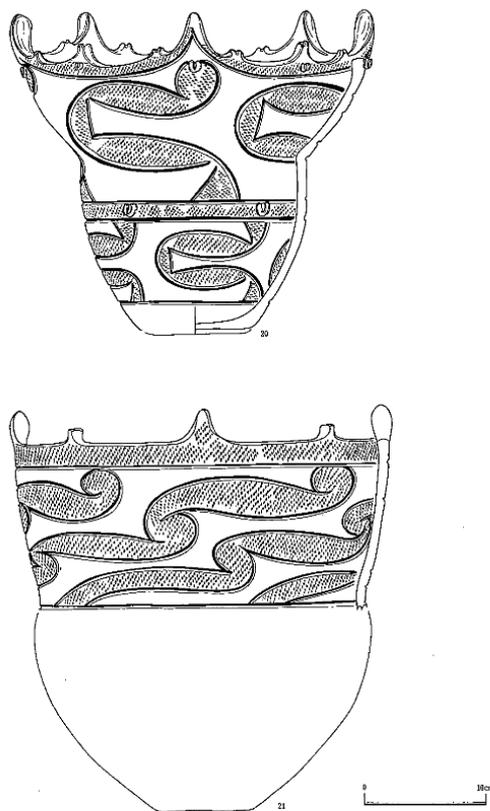
福島県立博物館調査報告書第17集「三貫地貝塚」 P396 第257図



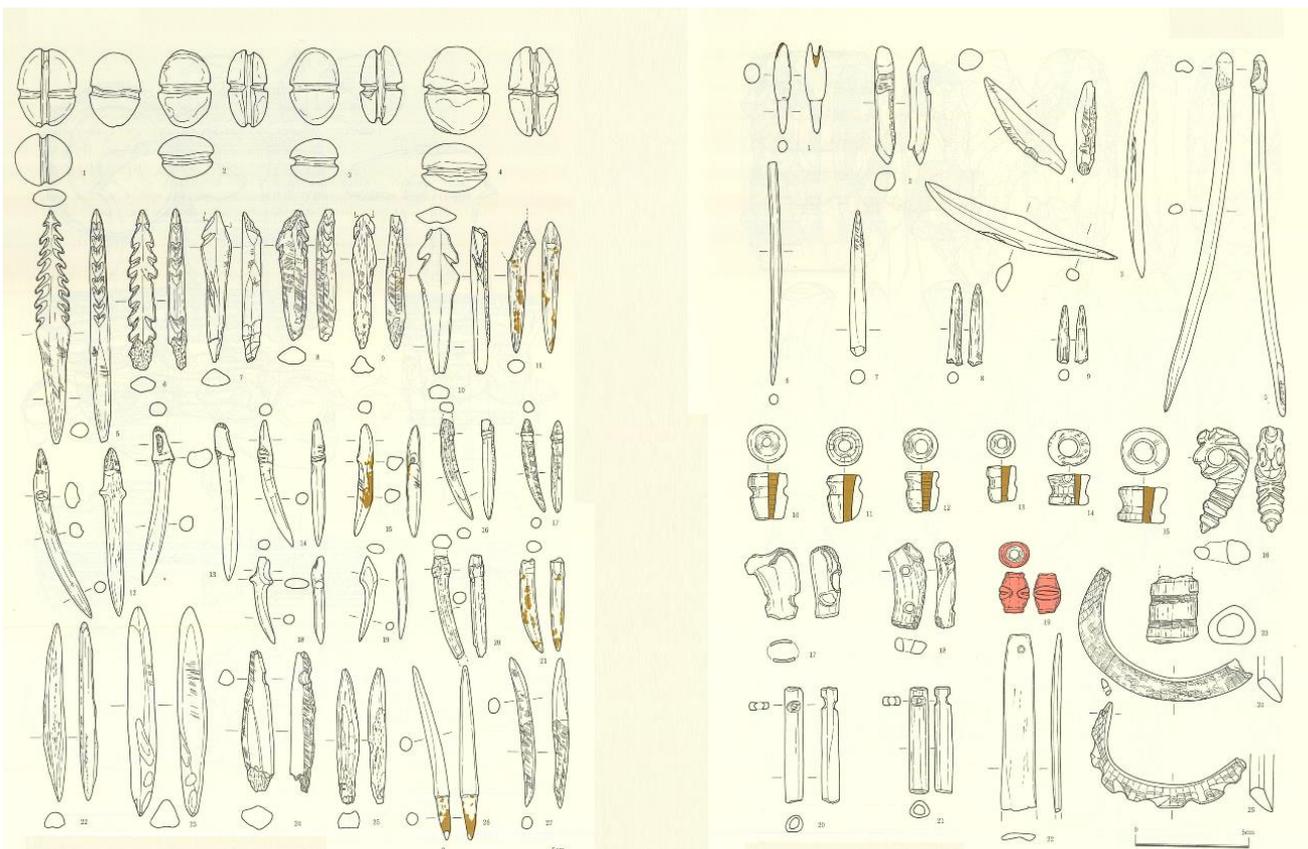
福島県立博物館調査報告書第17集  
「三貫地貝塚」(P397 第258図)



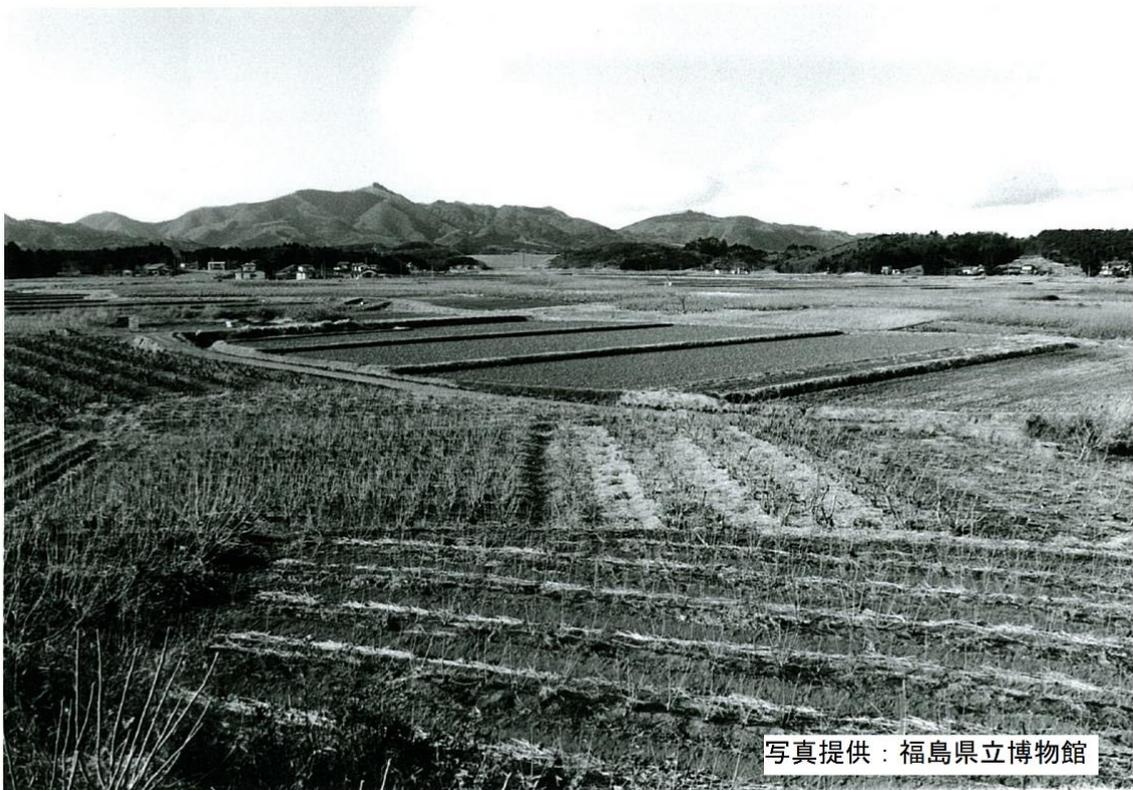
福島県立博物館調査報告書第17集「三貫地貝塚」 P398 第259図



福島県立博物館調査報告書第17集「三貫地貝塚」 P400 第261図



福島県立博物館調査報告第17集「三貫地貝塚」 P404, 405 第265図、第266図



写真提供：福島県立博物館

○三貫地貝塚 発掘調査風景等写真（写真提供：福島県立博物館）



写真提供：福島県立博物館



写真提供：福島県立博物館



9、12、13号人骨出土状況  
写真提供：福島県立博物館



14号人骨出土状況  
写真提供：福島県立博物館



1号人骨出土状況  
写真提供：福島県立博物館



1号犬骨出土状況  
提供：福島県立博物館



土器出土状況  
写真提供：福島県立博物館



土製品（耳環）出土状況  
写真提供：福島県立博物館



骨角器（ヤス）出土状況  
写真提供：福島県立博物館

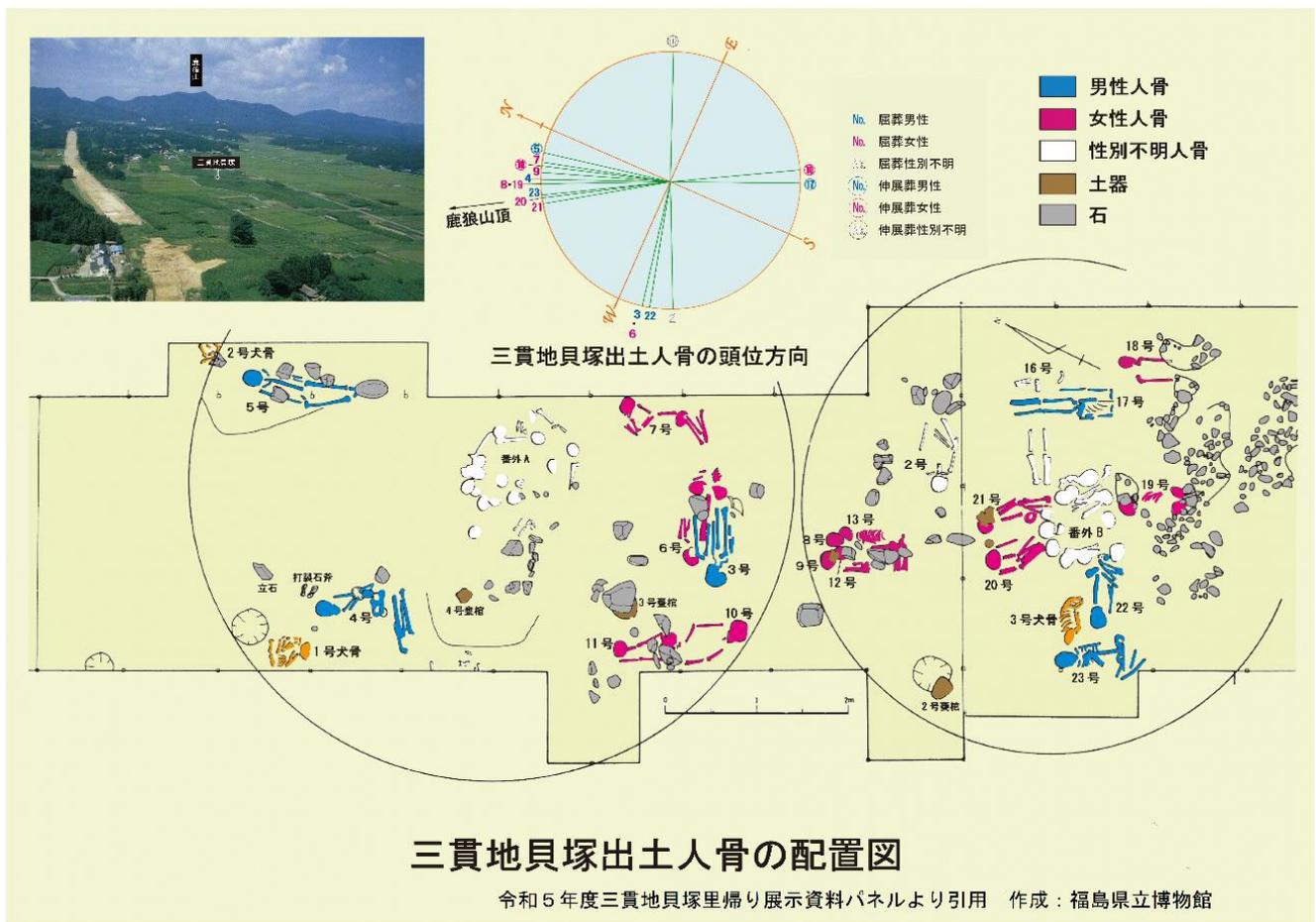


骨角器（管状装身具）  
写真提供：福島県立博物館

○三貫地貝塚の人骨とその埋葬について

三貫地貝塚からは100数体を超える人骨が出土しています。50体以上の人骨については、先に説明した昭和27年の調査によるもので、昭和29年には、東京大学理学部人類学教室により更に50体を超える人骨が出土したとされていますが、考古学的な報告書が刊行されていないため、詳細は不明です。

昭和27年の調査成果をまとめた福島県立博物館が刊行した報告書「三貫地貝塚（福島県立調査報告第17集）」のなかで、福島県立博物館の森幸彦氏は、埋葬された人骨の頭位が北北西を向くものが圧倒的に多く、その延長線上には手長明神の伝承が伝わる鹿狼山が存在しており、三貫地貝塚の縄文人たちによる鹿狼山信仰の可能性を指摘しています。



○三貫地遺跡

三貫地貝塚は、昭和27年の調査成果を得て、昭和43年8月に福島県指定史跡として指定されました。その後、昭和49年に鴻ノ巣ダムの完成に伴って、駒ヶ嶺地区の大規模な県営圃場整備事業が開始されます。関係団体との協議の結果、県指定範囲は圃場整備区画から除外されることとなりますが、指定範囲の周辺部については、更なる調査を行う必要があることが共通認識となり、昭和51年から昭和54年にかけて数回の調査が新地町教育委員会により行われました。この調査により三貫地貝塚の周辺には縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の長期にわたる遺跡が残っていることが判明しました。特に縄文時代の遺構に関しては、複式炉を有する住居跡、遺物の包含層が確

認されています。この調査の結果から、貝塚を形成した人々が住んでいた遺跡として、10万㎡を超える広大な範囲が三貫地遺跡として新しく認識されることになりました。

○三貫地遺跡 出土土偶及び土製品（新地町教育委員会所蔵）



所有：新地町教育委員会 三貫地遺跡出土 遮光器土偶（左：正面 右：背面）



三貫地遺跡出土 土偶



三貫地遺跡出土 土板

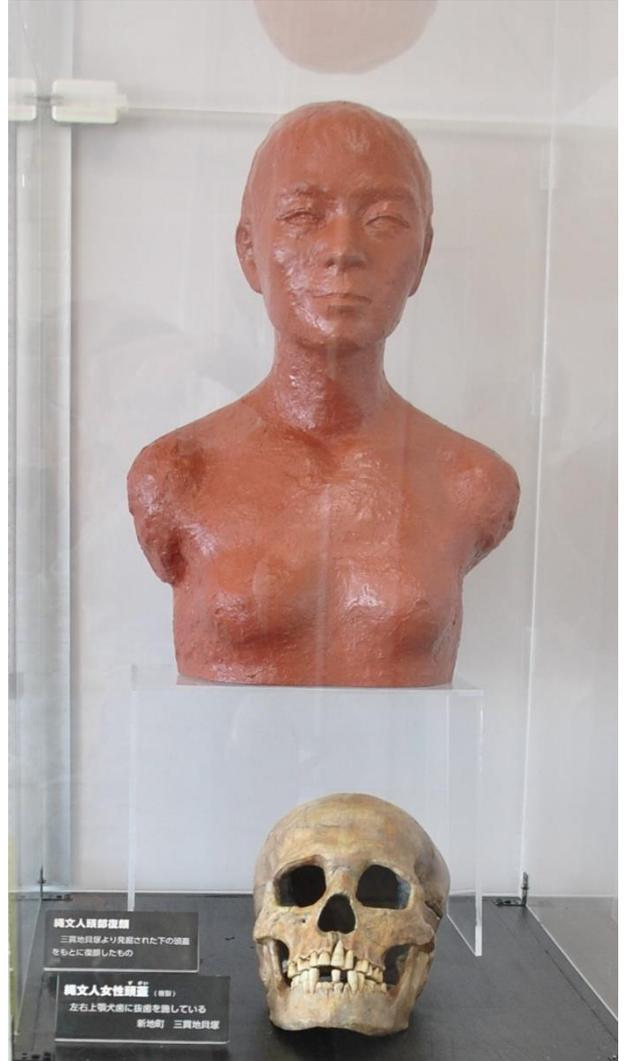


↑三貫地遺跡出土 亀形土製品

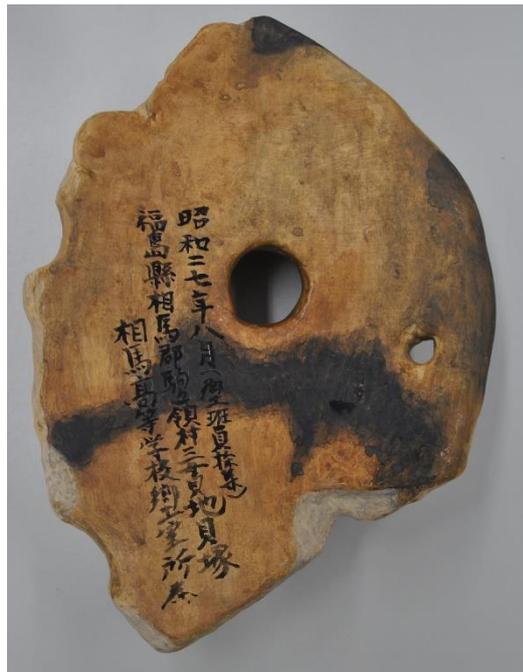
→

三貫地貝塚女性の頭骨とその復顔  
(レプリカ)

複製元、協力：福島県立博物館



三貫地貝塚出土 土面 (レプリカ) 複製元、協力：福島県立相馬高等学校↓

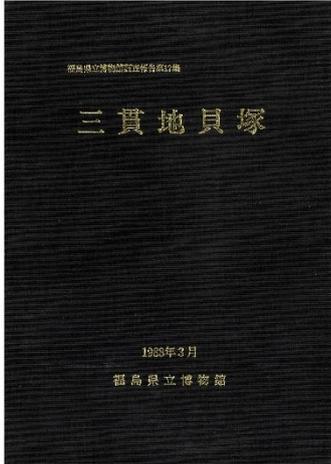


○資料のご案内

新地町図書館では、三貫地貝塚関連の書籍を所有しております。興味のある方は、ぜひご利用下さい。

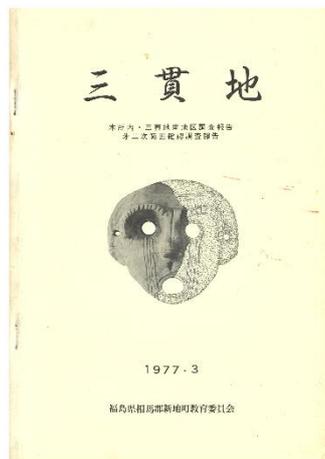
新地町図書館 TEL 0244-62-5031

図書館HP <https://shinchi-town.jp/site/library/>



三貫地貝塚（福島県立博物館調査報告書第17集）  
昭和27年に日本考古学協会の縄文式文化編年研究特別委員会により調査された調査報告書です。  
総ページ503頁と95版の図版によって構成されています。当時の貴重な写真がふんだんに用いられ大変貴重な一冊です。  
令和5年9月30日時点、福島県立博物館で、定価 4,000円にて販売されています。

福島県立 HP <http://general-museum.fcs.ed.jp>



三貫地遺跡の報告書については、他にも田丁場 B 地点などがあります。

また、新地町史歴史編には三貫地貝塚についての記載がありますので、興味のある方はぜひご利用ください。

なお、新地町史は 歴史編（6,000円）自然民族編（2,500円）資料編（3,800円）にてご提供しております。購入希望の方は新地町教育委員会までお問合せください。

お問い合わせ先) 新地町教育委員会 教育総務課 0244-62-4477

令和5年10月14日（土）～22日（日）の期間「令和5年度福島特定原子力施設地域振興交付金事業」を活用して新地町文化交流センター観海ホールで行われた企画展「三貫地貝塚暮らしと縄文人」のパンフレットです。



令和5年度 **三貫地貝塚** 暮らしと縄文人

福島県立博物館 博物館資料展示活用アウトリーチ事業

# 三貫地貝塚の暮らしと縄文人



令和5年  
**10月14日土** >>  
**10月22日日**

会場 新地町文化交流センター  
観海ホール



展示内容

- 1 三貫地貝塚の発見と発掘
- 2 三貫地貝塚の古さとムラの広がり
- 3 ムラの暮らしと道具
- 4 貝塚の暮らし
- 5 祈りとまつり
- 6 墓地からさぐる

1

テーマ **三貫地貝塚の発見と発掘**  
三貫地貝塚はいつ発見され誰が発掘したのか

三貫地貝塚は、1894年（明治27）に相馬市中村の舘岡虎三によって中央の学会に知られるようになりました。30年後の1924年（大正13）福島県の依頼により、東京大学人類学教室が新地貝塚とともに発掘調査を行いました。その時のメンバーの一人に、今日の縄文時代研究の基礎を築いた山内清男がおり、山内はこの発掘を「私の出合ったもっとも愉快なそして最も有益な一つであった」と述べています。山内は縄文原体（擦糸文）の研究・縄文土器の編年研究・縄文人骨の抜歯の研究で、たびたび三貫地貝塚を取り上げており、縄文時代の研究に欠かせない遺跡として捉えていたようです。

それから28年後、日本考古学協会に縄文式文化特別編年委員会（委員長／山内清男）が組織されて、1952年（昭和27）に比較的大規模な三貫地貝塚の発掘調査が行われました。

三貫地貝塚は1968年（昭和43）に県史跡となり、今日まで保護・保存されています。1977・79年（昭和52・54）には貝塚周囲（三貫地遺跡）で圃場を整備するため新地町教育委員会により発掘調査が行われ、貝塚を中心とする遺跡の範囲がさらに拡大している様子が明らかにされました。

■三貫地貝塚関係年表

西暦	和暦	内容
1719	享保4	佐久間義和『奥羽観蹟聞老志』 新地貝塚と手長明神伝説・鹿熊山について記述
1894	明治27	舘岡虎三「磐城国宇都郡駒ヶ嶺貝塚記」『東京人類学会雑誌』第9巻第96号 「位置 宇都郡駒ヶ嶺村大字駒ヶ嶺字高田小学三瀧寺（或ハ日ク三貫地） 世俗貝殻燭ト伝所ニアリ」
1924	大正13	新地貝塚発掘調査（5/1～8） 福島県史蹟名勝天然記念物事業として東京帝国大学理学部人類学教室に委嘱
1924	大正13	三貫地貝塚発掘調査（5/2・3）東京帝国大学理学部人類学教室
1924	大正13	山内清男「磐城国新地村小川貝塚発掘略記（小川貝塚-三貫地貝塚-惣穴群）」『人類学雑誌』第39巻第4号第5号第6号（6月）
1924	大正13	三貫地貝塚発掘（9月）山内清男
1925	大正14	山内清男「磐城国三貫地貝塚発見土器の擦糸紋」『人類学雑誌』第40巻第2号
1925	大正14	山内清男「石器時代にも繩あり」『土器底面及破片の石膏型（第六図版）に山内附図として「4. 結節なき縄の圧痕ある土器破片（磐城三貫地）」の石膏型を写真掲載』『人類学雑誌』第40巻第5号
1929	頃	山内清男作成の手書き編年表に「サンガンジ下層」「サンガンジ中層」と記載あり（伊東信雄1977）
1930	昭和5	新地貝塚附手長明神社跡国指定史蹟指定（2.28）
1931	昭和6	山内清男、縄文が縄の回転押捺と気づく
1937	昭和12	山内清男「日本先史時代に於ける抜歯風習の系統」縄文時代晩期の東北地方の例として三貫地貝塚を記載『先史考古学』第1巻第2号
1949	昭和24	日本考古学協会「縄文式文化編年研究特別委員会」主旨 層位的・型式学的分類を主とした「縄文式文化の編年的研究」の日本全体についての総合的研究（委員長 山内清男）組織
1952	昭和27	三貫地貝塚調査 日本考古学協会「縄文式文化編年研究特別委員会」
1954	昭和29	三貫地貝塚調査 東京大学理学部人類学教室
1968	昭和43	三貫地貝塚県史蹟指定
1977	昭和52	三貫地遺跡跡丁場A・B地点調査（9/12-10/31）新地町教育委員会
1979	昭和54	三貫地遺跡C～F地点調査（6/16-8/4）新地町教育委員会
1979	昭和54	山内清男「日本先史土器の縄紋」先史考古学会
1988	昭和63	福島県立博物館「三貫地貝塚」福島県立博物館調査報告17集

テーマ  
2

## 三貫地貝塚の古さとムラの広がり

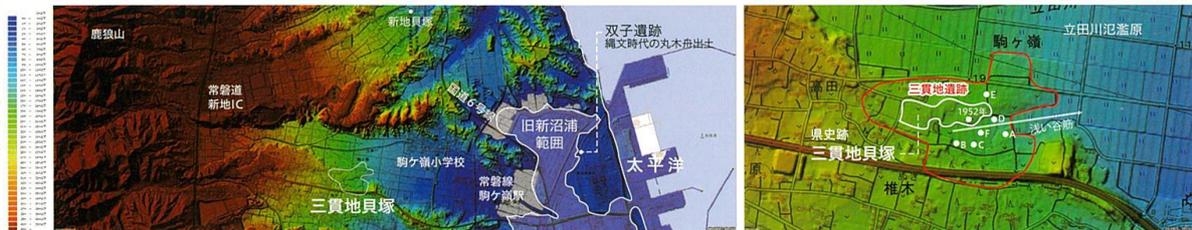
三貫地貝塚できたのはいつ頃か

三貫地貝塚は、町の南部を西から東に流れる立田川の氾濫原に、丘陵から東に延びる標高約 18 m 前後の扇状地性の低位段丘上に立地します。現在の海岸線から直線距離で約 4 km 離れていますが、かつては沿岸部であったと考えられます。

遺跡中央部に向かって東から浅い谷が入り、谷に面する南向き緩斜面に縄文時代の貝塚が残されています。1952 年（昭和 27）の発掘は貝塚部で行われ、土器や石器のほかにも大量の骨角器などの遺物の他に、50 体を超える埋葬人骨と埋設土器（子ども用のお墓）が発見され、集団墓地の様子が明らかになりました。

1970 年代の貝塚周辺部（三貫地遺跡）の調査では、住居跡が A 地点、埋設土器が A・B・C 地点、貝や骨を含む包含層（捨て場）が D・E・F 地点、お墓の可能性のある土坑が A・B・D 地点で発見されています。各地点とも大半が中期後葉から晩期後半の時期であることから、浅い谷筋の周囲で縄文時代中期後葉から晩期後半にかけて諸活動が展開し、一角に貝塚が作られたムラの姿を知ることができます。

これまでの各地点の調査からは、縄文時代中期後葉から約 2000 年間の長期に渡り、ムラが営まれていたことがわかります。これは、海と山に近く両者の自然の恵みが期待できる絶好のロケーションと住みやすい比較的大きな平坦地という好条件を三貫地が兼ね備えていたことを示しています。



三貫地貝塚の位置

三貫地貝塚の立地と発掘地点

テーマ  
3

## ムラの暮らしと道具

狩猟・漁労・植物採取

縄文時代の食料調達には、狩猟・漁労・植物採集が基幹生業となり、それぞれの活動を支えた道具が遺跡から出土します。

弓矢猟の矢に取り付けるガラス質石材（チャートや頁岩）で作られた石鏃が少数出土しています。遺跡付近では入手が困難な石材もあり、遠方とのネットワークを通じて入手したものと考えられます。貝塚からは、イヌの埋葬墓が見つかり、狩りのパートナーとして大事にされていたことがうかがえます。人骨からは、狩猟中の事故を示す石鏃が刺さった腰骨があることから、危険と隣り合わせの活動だったといえます。



発掘された埋葬犬

町内、新沼浦の東岸部にあった双子遺跡からは丸木舟が発掘されています。内湾との行き来には丸木舟が交通手段として使われ、釣漁・突き漁・網漁を支えていたと考えられます。

ドングリ拾いなど植物採集を直接物語るものは出土品として稀ですが、貝塚からは打製石斧が比較的多く発見されており、ヤマイモなどの根茎類を採取する際に、土掘具として使われた可能性があります。石材は粘板岩など地元産のものが用いられているのが特徴です。

三貫地貝塚で注目されるのは、製塩土器の存在です。B 地点からは大量の焼土や木炭とともに製塩土器も出土し、塩づくりを行っていたことがわかります。これら製塩土器には文様がまったくありません。海水を煮詰めると土器はもろくなるので、繰り返し使用することができません。土器好きの縄文人も、この 1 回きりの土器に文様を付けることをあきらめたのでしょうか？

テーマ  
4

## 貝塚の暮らし 漁労と道具

貝塚は海に生かされた縄文人の象徴です。三貫地貝塚からは漁労を支える骨角器が大量に出土しました。

骨角器の漁労具は、釣針と魚を突き刺して捕獲するための刺突具に大きく分けられます。刺突具は、獲物に突き刺さる尖った先端部と突き刺した獲物が外れないための逆刺<sup>ひさし</sup>からなるのが基本形態です。多様な形態とサイズがあり、地域の魚種と漁獲対象の大きさに応じて道具を使い分けていたと考えられます。刺さった先端部を獲物ごと縄で手繰り寄せるのがモリで、先端具を柄に固定するものをヤスと呼びます。

ヤスは、柄に1つ取り付けるものと複数取り付ける組み合わせ式のものがあります。刺突具には柄の固定のために固着剤として用いた天然アスファルトや漆が観察できます。天然アスファルトは日本海側の油田地帯に産出するもので、これも遠方とのネットワークを通じて入手したものと見られます。

骨角器の中には弭形角製品と呼ばれるものがあります。弭は弓の両端の弦を掛ける部分で、これに弓弦を結び弓に取り付ける考え方がありますが、貝塚からは中に刺突具が入った状態で出土しており、先端具を固定する部品とする意見もあります。

骨角器はその名のとおり主にシカの骨や角を素材として使います。今後、貝層の詳細な分析を行うことで、長期にわたる三貫地貝塚の暮らしを支えた技術や生業の季節性などが明らかになると期待されます。



テーマ  
5

## 祈りとまつり 土偶、第2の道具とは

縄文人は、自然に祈りをささげるため「第2の道具」とよばれる非実用品を作りました。その代表例が土偶です。乳房や大きく前方につき出したお腹と大きな腰回りが、意図的に表現されていることから妊娠した女性像を表現していることが分かります。

三貫地遺跡 B 地点の晩期の土偶は遮光器土偶<sup>しゃっこうき</sup>の小型のものですが、腕と脚を前に突き出し、股を開いた両脚も前に伸ばしています。お尻はフラットに成形されているので、尻を地につけた姿になります。これはポーズ土偶と呼ばれるタイプで、晩期のもは東北地方北部に多く、東北地方南部では非常に珍しいものです。亀形土製品と呼ばれる中空の土製品も丁寧なつくりで、これも北方の影響を受けている可能性があります。

土偶は完全な形で出土することが少なく、人びとが病気や怪我をした際の身代わりとして故意に壊したとする意見もあります。

県立相馬高校が所蔵する土面は、右目から4本の並行する線が、口元に向かって引かれあたかも涙を流しているかのような表現になります。儀式的舞う場面で三貫地に伝わる神話のワンシーンを演じるものなのでしょうか？この土面は1952年（昭和27）の発掘後の夏に調査区付近で採集されたものと伝わっています。集団墓地と関係する可能性もあります。



遮光器土偶（三貫地遺跡B地点）

亀形土製品  
（三貫地遺跡B地点）

テーマ  
6

## 墓地からさぐる

### 三貫地貝塚人の埋葬の特徴とは

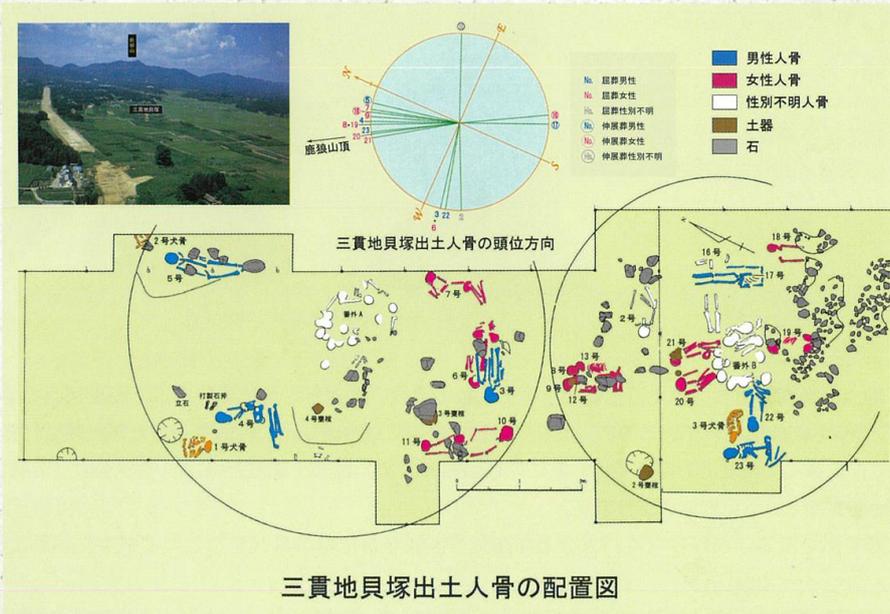
三貫地貝塚からは、これまでに100体以上の縄文人骨が出土しているといわれます。東日本の縄文遺跡の中では有数の規模になります。1952年（昭和27）の発掘調査は縄文時代後期から晩期の墓地の様子と人骨の出土状況が明らかになり、非常に大きな発見となりました。

発掘区の中央部からは、膝を折り曲げた屈葬が14体、体を伸ばしたままの伸葬が5体見つかっています。頭部の方向を検討すると北北西を向くものが多く、埋葬の方向に何らかのルールが存在したことを知ることができます。北北西の方向には新地町のシンボル「鹿狼山」があり、三貫地縄文人の信仰や精神文化に関わる可能性があります。

「番外A・B」とした2か所の集積人骨は、頭骨を環状に並べ、中心部に大腿骨など四肢骨を入れた十数体分のお墓です。各部位の骨が順番につながっていないことは一目瞭然で、これらは一度埋葬した人骨を掘り出して主要な骨を集めた「再葬」のお墓になります。こうした行為を行う動機は不明ですが、祖先の祭祀を行うことで集団や血縁の関係性を再確認する役割があると考えられます。

出土した人骨には抜歯が認められる個体があります。抜歯は儀礼として行われ、口を開いたときに目立つ犬歯を抜くことが多く、集団の中で立場を示す一種のコミュニケーションツールとしての役割が考えられます。

身体装飾・表現としては、角製のヘアピンをはじめ、腕飾りの貝輪、勾玉に相当する牙玉、角製の腰飾りといった動物素材の装身具が出土しています。これらには動物の力を身に着けるまじないの意味があるのかもしれませんが。また直径が1.5cmから6cmまでの各サイズの土製の耳飾りも出土しています。これはピアスと同じで耳たぶに孔をあけて装着するもので、女性が人生の節目でより大きい耳飾りを装着していくプロセスがあると考えられ、耳飾りをみればその人の立場が一目で知ることができるツールなのです。



主催：新地町／新地町教育委員会、共催：福島県立博物館、後援：福島民友新聞社／福島民報社、協力：新地町郷土史研究会  
 (お問合せ：新地町教育総務課 TEL0244-62-4477 受付時間 平日9:00～17:00)

令和5年度福島特定原子力施設地域振興交付金事業

《参考・引用文献》

- 小此木忠七郎 「福島県発見石器時代土偶図版及解説（福島県史跡名勝天然記念物調査報告第4）」  
館岡虎三 「磐城国宇多郡駒ヶ嶺貝塚記 貝塚ト手長明神トノ関係  
（東京人類学会雑誌第96号）」 日本人類学会（-）
- 山内清男 「磐城国三貫地貝塚発見土器の捺糸紋  
（東京人類学会雑誌第42巻第2号）」 日本人類学会（-）
- 山内清男 「日本先史時代の於ける抜歯風習の系統（先史考古学第一巻第二号）」先史考古学会（1937）
- ☆新地町教育委員会 「三貫地遺跡緊急調査報告昭和51年3月」（1976）
- ☆新地町教育委員会 「三貫地 木所内・三貫地南地区調査報告第二次範囲確認調査報告」（1977）
- ☆新地町教育委員会 「三貫地 田丁場 A 地点調査報告田丁場 B 地点調査報告」（1978）
- ☆新地町教育委員会 「三貫地遺跡 C 地点調査報告」（1980）
- ☆新地町教育委員会 「新地町史 資料編」（1982）
- ☆福島県教育委員会 「相馬地域開発関連遺跡分布調査報告 I」（1984）
- ☆福島県立博物館 「三貫地貝塚 福島県立博物館調査報告第17集」（1988）
- ☆新地町教育委員会 「新地町内遺跡発掘調査報告書 閩崎遺跡・三貫地遺跡」（1997）
- ☆新地町教育委員会 「新地町史 歴史編」（1999）
- ☆新地町教育委員会 「三貫地遺跡発掘調査報告書」（1999）
- ☆新地町教育委員会 「国指定史跡新地貝塚附手長明神社跡保存管理計画書」（2004）
- ☆東北歴史博物館 「東北発掘物語2」（2004）
- ☆斎藤成也（監修） 「DNA でわかった日本人のルーツ 最先端科学が明らかにした縄文人」宝島社（2016）
- ☆斎藤成也 「日本人の源流 核 DNA 解析でたどる」河出書房新社（2017）

著書名の先頭に☆印のついている資料は、新地町図書館にて蔵書しております。